

森千香子著

『ブルックリン化する世界

——ジェントリフィケーションを問いなおす』



評者：南 修平

著者の森千香子は移民研究やレイシズム研究の分野で多くの論考があり、中でも『排除と抵抗の郊外——フランス〈移民〉集住地域の形成と変容』（東京大学出版会、2016年）はその代表作だろう。フランス「移民」研究で知られる森がニューヨーク市ブルックリンに場所を移し、ジェントリフィケーションの研究を行った成果が本書である。

森の説明に従って本書の概要を見ておこう。3部で構成される本書は、第I部で21世紀以降のブルックリンの空間（1章）と住民構成の変化（2章）が複数のスケールで考察される。第II部ではジェントリフィケーションの過程で社会・文化的背景の異なる人びとが日常的に接触し、空間に共存する経験が具体的に描かれる。その考察対象は立ち退かされた者（3章）、地域にとどまる者（4章）、転入者（5章）、コミュニティ全体（6章）で、住民へのインタビューや参与観察を中心に、住民自身がジェントリフィケーションをどのように認知し、それがいかなる帰結を生むのかが述べられる。第III部ではこのような空間において人びとのつながりが、何を媒介に生まれ、そこにはどのような緊張や課題が生じているのかが検討される。街

頭行動から教育活動までの幅広い「反ジェントリフィケーションの実践」（7章）が、人種横断的な共生の試み（8章）という側面も有している」と語る森は、その積み重ねが社会的資源になる（9章）とし、それを通して、ジェントリフィケーションを住民間の「対立の争点」ではなく「共通の課題」に読み替える「ジェントリフィケーションの再解釈」が起きたことを示そうとする。そして、終章では日本の「共生」をめぐる議論に対して自分の研究はどのように資することが出来るのかが論じられる。全体を通じて豊富な参与観察とインタビュー記録が配置され、住民のジェントリフィケーションに対する捉え方や感じ方が鮮明に伝わってくる。また、人と人との関係に存在する微妙で繊細な差異や感情に一貫して強い注意が向けられているのも大きな特徴だろう。

ここから、本書の内容をさらに詳しく確認し、重要な論点を挙げていく。1章では連邦レベルと市レベルという異なるスケールでの住宅政策史が叙述される。凄まじいのはブルームバーグ市政以降進んだ大規模再開発である。不動産デベロッパーを筆頭に金融機関、情報ハイテク産業が再開発事業に参入した結果、イースト・リヴァー側のウォーターフロント地区は文字通り一変した。住宅ローンの証券化＝金融商品化が進んだことで再開発は海外資本も加わって一気に加速し、家賃の高騰や修繕拒否が相次ぎ、経済的余裕がない人びと——特に有色の人たち——は次々に追い出される事態が進んだ。人びとが去った住居は観光客用の民泊に模様替えとなり、かつてブルックリン造船所やブッシュ・ターミナル、陸軍ターミナルといった全米を代表する大規模工場や倉庫が集中していた地区は完全にその姿を失った。ニューヨーク労働史を研究する評者が訪れていた2004-2008年ころのブルックリン造船所跡地は錆び

た建物と割れたガラス窓が目立ち、周辺の道路や歩道は凹凸が多く、雑草は生え放題であった。しかし、2014年に来た時の造船所跡地はミュージアムを兼ねたお洒落なビルに変わり、古びた倉庫群の多くは若いクリエイターのラボや事務所となり、以前の面影は全くなかった。隣接するダンボ地区は今や観光客に人気のニューヨーク随一のスポットである。

2章ではブルックリンでの人口変動について、地区全体、それを18に分けたコミュニティ地区、さらにそのコミュニティ地区内の街区という異なる単位で詳細に検証される。ここで森は「低所得者層の地区に富裕な白人が流入し、旧住民の立ち退きが進む」というジェントリフィケーションの定義に疑問を示す。そしてブルックリンでのジェントリフィケーションを「高度ジェントリフィケーション地区」、「ジェントリフィケーション進行地区」、「移民化地区」、「衰退する黒人集住地区」の4つに大別し、それらが独立したものではなく周囲との関係の中で特徴化が進むこと、強い特徴を持つ地区の中でも別の傾向が存在することを指摘する。そして街区に分け入り、「景観が変化し、地価が上昇したからといって、住民構成が一夜にして変わるわけでもなければ、人種マイノリティの低所得者層住民が一気に立ち退くわけでもないことに注意を促す。都市のハード面（景観、建物）の変化とソフト面（住民、利用者）の変化は完全に連動するのではなく、ある種の不協和を生みだしながら進行し、そこに異なる背景をもつ集団や人びとの「身体的共存」が生じている」と森は述べる。

続く第Ⅱ部で詳細に「身体的共存」の中身が検証される。先行研究ではジェントリフィケーションの過程で異なる背景を持つ住民の混在が起きることに焦点をあてたものが少ないという森は、順に立ち退かされた者（3章）、地域に

とどまる者（4章）、転入者（5章）、コミュニティ全体（6章）を考察し、住民それぞれがジェントリフィケーションをどのように感じ、捉えているかを探る。自らの手法を「認知としてのジェントリフィケーション」と呼ぶ森の視点は徹底して人びとの日常に向けられ、日々の暮らしの中で実感されるジェントリフィケーションが抽出される。それはまず不動産業者による黒人やラティーノの集住地区に対する圧力の集中であり、自ずと人種が浮かび上がる。そして年齢、ジェンダー、階級といった変数も同時に作用し、特定の属性を持つ人びとに立ち退きが迫られている実態が否応なく住民に意識され、可視化されるのである（3章）。

地域にとどまった者はどうか。かつて住居や商店、通り、学校といった地域内の空間に存在した隣人との絆は次々に失われ、景観や風紀重視を理由とする露天商や地下鉄内パフォーマンスに対する規制（それらは重要な生活の糧であった）、デヴェロッパー主導による通りやエリア、建物の名称変更が進んだ。また工場の壁などに描かれていた落書きは「アートとしてのグラフィティ」に変わり観光客の人気を呼ぶが、昔からの住民は「自分たちがつくってきたもの」が奪われる「文化の盗用」と捉え、地元住民なのに喪失感に苛まれ「部外者意識」を持つというねじれた現象が強まっているのである（4章）。

一方で森は新住民対旧住民という二項対立的図式にも警鐘を鳴らす。都市の急速な変容をつくり出すのは流入してくる白人の新中間階級——ジェントリファイアーだとする先行研究の理解に対して森はジェントリファイアーを詳細に観察し、その中に経済的苦境にあえぎ（そのレベルは地元住民と同じではないとも付言）、立ち退きの脅威に晒される実態を指摘し、地元住民の生活文化を保全しようとする新住民もい

ることを強調する。また、黒人住民の中にもジェントリフィケーションから利益を得ている者が当然存在し、内部の格差も示す。このほか、アフリカやカリブ海地域出身の移民と古くからの黒人住民との微妙な関係や、流入するアジア系中間層と他のマイノリティ集団の緊張関係、ブルックリンに集住するユダヤ系住民内の差異、そしてセクシュアル・マイノリティの流入とその中で顕著な差異（特に有色の人たちの苦境）などさまざまな具体例が示され、複雑な「差異の坩堝」の間に走る分断線を描き出す。多様な差異を抱えた人びとは同じ空間に「共存」してもその多くは交流がなく、それが身近な他者への危険視につながっているとして、ジェントリフィケーションが住民の認知の枠組みに深刻な影響を与えているとする（5章、6章）。

ただしそれだけではない別の可能性を論じるのが第Ⅲ部である。ここでは住民同士の矛盾に向き合う取り組みが紹介され、特に2000年代後半以降再び活性化し始めたコミュニティ・オーガナイズング（CO）に焦点が当てられる。COはさまざまな住民運動の中でもとりわけ住民の参加を重視し、コミュニティの改善だけでなくより大きな社会変革を志向することが特徴である。森はブルックリンでCOを展開する「クラウンハイツ・テナントユニオン」、「フラットブッシュに平等を」、「サンセットパークのプエルトリコ人統一団体」の3団体による多彩な実践例を紹介し（7章）、その意義と課題を論じる（8、9章）。

地域名を冠した3団体はそれぞれブルックリンの中でも古くからマイノリティ住民が多数を占める地域で活動する一方で、地域住民の多くが借家人であるため、同じ建物や地域に住む白人やアジア系などの新住民も積極的に組織している。定期的にミーティングが開催され、そこ

では立ち退き圧力や家賃値上げに対抗するための法的知識や行政との交渉方法、修理を拒否するオーナーへの対応、カビの放置など不衛生な住宅管理による健康被害など、借家人が共通して抱える課題が取り上げられ、参加者は借家人の権利をどのように守り行使するかを学ぶ。こうした住民主催の学習会のほか、公共図書館やコミュニティ施設、文化施設でも反ジェントリフィケーションに関連するワークショップ、オンライン・データの活用方法、演劇など多種多様なイベントが開催され、地域住民が参加しやすい取り組みが数多く行われている。

こうした取り組みは「単なる対抗手段にとどまるのではなく、「反ジェントリフィケーション」を共通分母に集まった多様な人びとと新たなコミュニティを創造することの模索」であり、オルナタティヴの要素を持つと森は評価する。確かに人種横断的な運動のうねりは市や州単位での政治に影響を及ぼしており、その最大の成果は2019年6月に成立した州全体で家賃に規制をかける家賃安定化法であった。州議会選挙でも住民運動が政治と接続することで大きな影響が現れ、2020年6月の民主党指名選挙では住民運動出身の候補が次々に指名を勝ち取る「番狂わせ」が起こった。

人種横断的な住民運動の中で重要な役割を担っているのがコミュニティ・オーガナイザーである。会議の場で人種感情があらわになるとオーガナイザーがこれを緩和し、関係をつないで強化する地道な努力を積み重ねている。例えば、マイノリティ住民には常に自分たちを追い立てるのは白人不動産業者という認識があり、どうしても感情が高ぶるが、そんな時は、追い立てられるのは白人住民も同じであり、共通の敵は不動産業者だということを粘り強く説く。平日夜に行われる会議では必ず食事の時間をとり、準備や食事中の会話を通じてお互いを知る

機会が重ねられる。そうすることによって、誕生日会やホームパーティーでの相互訪問、ピクニックなど「普通の」付き合いが生じ、大切な友人関係に発展していく。

森は一連の取り組みを分断という状況に見出される「つながり」と捉え、差異と共通性は両立するものと理解すること、ミクロな日常の取り組みと大きな構造的問題は相互に影響を及ぼすことの重要性を主張し、「分断論を学びほぐし、共生を実現する可能性が広がっている」とする。確かに、同じ地域に住んで暮らし続ける以上、敵対・無関心・積極的交流など何かしらの相互関係がつくられる。人種やジェンダー、セクシュアリティなど互いの間を分かち線=差異があるとしても、ジェントリフィケーションや搾取・収奪などより大きな権力の圧力に直面するという共通性が差異を抱える相互の関係を発展的に構築する可能性には大いに同意したい。差異を認識した上で関係を紡いでいくことの可能性については、昨今注目されるインターセクショナルリティをめぐる議論でも強調され、森自身はその用語を用いていないが、共通するところは多いように感じた。ブラック・ライヴズ・マター (BLM) 運動に注目が集まるのも、この運動が決して人種だけにフォーカスしたのではない、包括的かつ交差的視点を有していることに大きく起因するからであろう。

ただ、どうしても気になるのは、こうした取り組み自体は状況が違うとはいえ、これまでの歴史の中でも確認でき、それらはその後どういう展開を見せたかということである。例えば本書で詳述される黒人とユダヤ系住民の関係を振り返ってみよう。1960年代終わりから70年代初頭にかけて、ブルックリンではコミュニティ・コントロールをめぐる黒人やプエルトリコ系住民とユダヤ系が主導する統一教員労組が激しく対立した。隣のクイーンズでも公共住

宅建設をめぐるイタリア系やユダヤ系住民が大規模な反対運動を展開し、人種間の亀裂は深刻化した。何が作用して緊張関係がスパークし、深刻な対立に転化するのか、当時から半世紀を経た今でもそうした脆弱性は残り続けているように思える。本書の例でも、ブルックリン反ジェントリフィケーション・ネットワーク (BAN) の運動内にみられる緊張関係は、かつて「ミシシッピ自由の夏」であらわになった地元黒人と白人のヴォランティア学生との緊張関係を彷彿とさせる感があった。方針や打ち出すべき主張、運動形態など、要求を突き詰めていく過程で潜在的に抱えていた矛盾が抑えきれない段階に達するという懸念である。

白人住民がどのように運動にかかわるのかについて、森は白人がマイノリティ住民の「同盟者」という立場をとることに積極的な評価を与える。「白人は黒人に自己同一化するのではなく、支配者集団に属していることを自覚し、…運動はともにおこなうが、決定権は黒人に委ね、白人は支援者の役割を全うする」とし、白人はこうした「同盟者」の役割に徹することによって、「自分の意見をもちつつも、立場を考えながら調整をはかり、黒人の解放と同時に支配関係の構造から自分自身を解放する」という森の主張は、理論的には妥当だろう。だが、実践は容易ではない。常に矛盾が深刻化し、それが内部分裂や離反につながった事例は枚挙に暇がない。こうした緊張関係は人種に限らず、エスニシティ、ジェンダー、セクシュアリティ、宗教など様々な面でも常に顕在化してきた（本書でも黒人活動家同士がトランスジェンダーに対する立場をめぐる決裂した事例が出てくる）。

もはや21世紀の現代は半世紀前の状況とは異なり、若い世代が担うBLM運動やブルックリンのCOではそれを乗り越える見識と力がある、本書で出てきたような地道な取り組みを紡

ぐことこそが、時間はかかっても、より強固な相互関係をつくり出し、新たな「共生」関係を構築していくものだと思いたい。一方で、歴史的な視点でその変化を検証していく慎重な態度も求められる。大きな権力の攻勢の前に動揺し、亀裂が簡単に走ってしまうようなものでは対抗できないからである。

事態は現在進行形で動いている。表面的な「多文化共生」ではない、差異や対立的側面を

抱えながら、いかに人びとの間に新たな関係をつくり出すことが出来るのか——21世紀のこれからを考える上で本書は示唆に富んだ必読の書である。

(森千香子著『ブルックリン化する世界——ジェントリフィケーションを問いなおす』東京大学出版会, 2023年11月, vii + 350 + 21頁, 定価3,200円+税)

(みなみ・しゅうへい 専修大学文学部教授)